わゆる「昭和元禄」と言う時代の中で、何不自由なく育って来た苦労しらずの者であります。

諺にも「楽は苦の道、苦は楽の種」とか、「若い時の苦労は買ってもせよ」といいます。果してこれからの苦難、いろいろの問題にあたってどう乗りこえていけるのか、またこれは、よほどの至難の業ではなかろうかと思うのです。

さて、私は農業に携る身でありますが、以前までは、恥かしながら、自らも農業に対して劣等感を抱いていたのですが、幸にも、愛農会と出合い、正しい農業感、人生観を学ばせていただき、どうやら農業に夢と、希望を見いだせるようになりましたのは、二十年間の中での一番大きな収穫でありました。

「農は国の本」と申します。人間が種を蒔くのですが、育てて下さるのは、天であり大地であります。

正に、農業とは、自然との協同の芸術でありそして農業こそ人間が人間らしい生活を営んでいける唯一のすばらしい仕事であり、国民の生活を守っていく上での聖職であると思います。

しかし、今日のきびしい農業事情の中でこれから生きていくのは、たいへんであろうかと思いますが、この自分に置かれた境遇の中で、おごることなく、卑下することなく、友を大切にし、先輩を尊敬して悔いのない人生を歩んでいきたい。そして、自分が小さな一灯となって、人間が人間らしい生活のできる、明るい農村建設のために奉仕して、努力していきたいと思います。

学生で迎える二十歳

橋場　平山知子

私は進学したために、成人したというのに少なくともあと二年間は、親のスネをかじって、社会に寄生しなくてはならない。

学生というのは納税の義務はなし、学割で優遇され、おまけに、二十歳を過ぎれば選挙権も与えられる。

考えてみると、義務も果さないうちから、権利があるというのはおかしな話だ。

寄生虫のごとく甘い汁を貪り、いかにものん気そうな学生ではあるが、実は内心おだやかではないということを、世間の方々は御存知だろうか。

同年代ですでに社会に巣立っている友は、第一線で働き、経済的にも立派に自立している。

話をしてみると考え方も社会人らしく大人びている。我身を顧みて恥入る次第である。

しかし、そこでしょげ返ったままでは、理屈（その上に『へ』の字がつくかもしれないが）を身上とする学生の名がすたろうというもの。今一度、二十歳を過ぎて、尚、学生でいることの意義を考えてみようと思う。

まず、学生であるということは、学問をすることが第一の努めである。学問をするとは何を意味するのか。

それは「知識を身につけること物の見方や考え方を学ぶこと」これは偉い先生方が何度もおっしゃるのだから、本当のことであるらしい。

しかし、そうだとすれば、大学は巨大なレジャー施設とも評される今日いわゆる学生と呼ばれる人達の中に、本当の学生がはたしてどれくらいいるかは疑問だ。

そうでなくても、今やどの学問分野においても、その資料、文献等の文化的集積量たるや、とても四年やそこいらでは身につけるなどとうてい無理なほどである。

だから私は学生とは、知識やものの考え方を身につけようと思う者である、と勝手に定義している。

少々自己防衛的になった。これは屁理屈である。

ところで何故、私は二十歳を過ぎても、そんなことをしようとするのだろうか。

実は自分でも、学問をしたからといってどのくらい利益になるかはわからないのだ特別な技術や資格が必要な専門職、たとえば医師とか弁護士といった職業は別だが、今や大学卒のメリットは急速に減りつつある。

それでもなお進学した理由は、アウトサイダー（部外者）でいたかったからである。

実社会に出て働けば、確かに構成員として、重要な位置を占めるに違いない。

しかし、他人同志の争い事は冷静に判定できても、こと自分の事となると、なかなかそうはいかないのと同様、社会に出てしまうと、表にはあらわれて来ない世の中の動きというものを、見極めることが難しくなってしまうのではないだろうか。

社会人には社会人としての着眼点があるのだろう。

しかし、そこを一歩離れたアウトサイダーとしての見方もまた必要であり、時としてその方が客観的に判断していることがあるのではないかと思ったのだ。

しかし、それはいわば立前で、本音を言ってしまえば大学とても社会の中に位置するものだから当然、社会情勢や地域の特色、個人の事情等にゆさぶられて、ものの見方、考え方などというものは、いつも不安定に動いている。

とても時代の流れをつかむどころではないのだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチの随想録の中にこんな一節がある。

「科学とは、その現在たると過去たるとを問わず、可能なる事物の観察である。先見とは、徐々たるものとはいえ、起こりきたる事物の認識である。」

科学と先見の力を体得することができたならば、学問をしながら社会に寄生した数年間も、無駄ではなかったと言えるだろう。

今の正直な心境は、自分の将来に対する漠然とした不安と期待が複雑に入混じっている。

「何ができるだろう。あるいは何もできないかもしれない。何でもいいから何かやりたい。」と。

しかし、今はとにかく、はやる心を抑えつつ、もうしばらくは学生に身を沈め、力を蓄えようと思っている。

私の本当の成人式は、親の保護を離れ、自立することができる日になるだろう。